

宇野浩二「屋根裏の法学士」について

菅井九一郎

一 はじめに

宇野浩二は大正八年四月に『文章世界』に発表した「蔵の中」でデビューを果たし、同年九月以降に次々と発表した連作短編〈苦の世界〉などの好評により人気作家の地位を得た。しかし、デビュー前には長い準備期間があった。その期間の始点は創作の定義によっても変わるが、田澤基久氏の調査によれば、宇野は中学生時代から投稿雑誌に作品を寄せており、少なからぬ作品を採用されている⁽¹⁾。そして、上京・早大入学後には、三上於菟吉らとともに雑誌『しれえね』を発行して自ら作品を寄せている他、大正二年には単行本『清二郎 夢見る子』を刊行し、早大中退後は海外の小説の翻訳や、童話の執筆も盛んに行っていた⁽²⁾。

こうした準備期間の中でも、宇野のデビュー、そしてデビュー後の創作活動を考えていく上で特に重要と思われるのは、デビュー前年の大正七年である。この年に宇野は、翻訳・童話執筆から脱して、二本の小説を発表することができた。一つは『大学及大学生』⁽³⁾に掲載された「二人の話」、もう一つは『中学世界』⁽⁴⁾に掲載された「屋

根裏の法学士」である。この二作品に対して文壇からの目立った評価はなかったようだが、「二人の話」は、友人谷崎精二の評価を通じて宇野に大きな自信を与えただけでなく、短編小説「苦の世界」の冒頭部となつて宇野の作家的地位確立に貢献するなど、宇野の経歴や創作を考える上で極めて重要な作品となっている。研究史においても、長編『苦の世界』の一部として扱うものも含めて、その内容には度々言及・考察がなされているようである。

一方「屋根裏の法学士」は、「二人の話」のように、宇野の地位確立に際立って貢献するというところそなかったが、宇野の回想などにあたってみると、早書きしたことから当人には自信がなかったらしいにもかかわらず、やや意外に思うほど同時代人の好評を得ていたことがわかる。例えば、『蔵の中・子を貸し屋 他三篇』⁽⁸⁾の中にある「あとがき」には次のようにある。

(前略) この「中学世界」を出してゐた博文館に、その頃、保高徳蔵君が、「女学世界」の記者として、つとめてゐたので、この小説が「中学世界」に出てまもなく、私に、その頃、博文館の編輯主任をし、自然主義の少壮論客であつた、長谷川天溪

先生が、保高君に、「君、日本にも、かういふ小説を書く者が出てきた、といったので、あれは僕の友人です、と、いった、」と、知らしめてくれた。

また、宇野に届いた好評はこればかりではなく、「私の小説道」⁽⁹⁾の中の「私の歩いて来た道」という回想を見てみると、右と同内容の回想に、「その後、葛西善藏氏がこの作を私の初期の作中第一等だといつてくれた」とつけ加えている。さらに、これは当人に伝わっていたかどうか微妙なところながら、宇野の没後に開かれた六回目の「浩二忌」で、中野重治が本作を評価していたのを、水上勉が次のように伝えている。⁽¹⁰⁾

(前略) 中野重治氏が卓話の指名を受けて立ち上がり、朴訥な物言いで話されたことを思い出す。宇野浩二の文章を最初に読んだのは「屋根裏の法学士」で、この作品はたしかにある魅力をもっていた。とんでもないおもしろい作家が現れたという印象を受けたと氏が話されるのを聞いて、長谷川天溪の賞賛とも思いあわせた。

本作が発表された当時、中野重治が中学生であったこと、おもしろい作家が「現れた」という印象を受けていることなどを合わせて考えると、彼は『中学世界』掲載の初出版を読んでいた可能性が高く、これも一種の同時代評として見る事ができるだろう。

これらの感想のうち、作品発表後すぐに宇野の耳にとどいた長谷川天溪の感想は、強く宇野を力づけてその後の執筆の一つの支えとなり、また、現代に伝わっているものだけでも少なからぬ好評のあ

ることから、宇野の作家仲間の間での評価上昇にもある程度貢献があったものと想像され、本作は目立たぬながら宇野の経歴上それなりに重要な役割を果たしたと言えそうである。さらに、右に示した三人の評価を見てみると、三人に世代・資質の相異があることから、三人が本作に一致した魅力を見出していたと考えることにはやや難があるが(しかも葛西の評価は他と異なり、初出版を見てのものか定かでない)、少なくとも本作が同時代人(あるいは同時代の作家)たちに対して独特の魅力を伝えていたということは間違いなく言えるだろう。特に長谷川天溪の高い評価は、批評家としての豊富な文学的知識を背景にしたものである可能性があり、「かういふ小説」というのがどのような小説か判然としないながら、興味深いものに思われる。

さて、以上のようなことから、本作は宇野の経歴上軽からぬ役割を果たし、中々の好評もかち得ている作品であると言えるものと思われるが、本格的研究の蓄積となると、「蔵の中」や『苦の世界』などを除いた他の宇野作品同様、まだあまり進んでいないようである。主な先行研究としては小林隆久氏の『夢見る部屋』系譜——宇野浩二とボオの文学における室内空間」と、田澤基久氏の「宇野浩二初期作品の検討——二人の話」から「蔵の中」まで(上)⁽¹¹⁾、そして藤原子氏の「書くこと」をめぐる小説——宇野浩二「屋根裏の法学士」『転々』——⁽¹²⁾などを挙げられるが、まず小林氏は「ボオを導き手として、室内空間を新たな眼で捉えなおし、その文学空間としての魅力を再発見していった」という大正作家の

傾向を宇野文学に見出そうとする中で、「屋根裏の法学士」については主人公の造形にフランス文学に登場する遊民（覗く人）との繋がりを見、（覗く人）、世間に迎合しない孤独者といった要素の共通などから、スウヴェストルの『屋根裏の哲人』の影響を指摘している。また、田澤氏は宇野の初期の作品から独特の夢の語り方を見出す中で、「屋根裏の法学士」については主題を「現実を遊離しての夢の構築」と見、本作を「二人の話」のモチーフを継承しながら、そこではいまだ未成熟であった、現実から離脱し、現実と夢を転倒し、現実を無意味化して夢の實在感を獲得するという宇野文学のパターンを定立した作品」と位置付けた。一方藤氏は、「蔵の中」の創作過程からは宇野の「小説が成立する要件に対するある種の批評意識」が窺われるとした上で、その反映を「屋根裏の法学士」・「転々」の中からも探り出し、「屋根裏の法学士」については、「文壇への上昇志向を持ってなくなった無名作家によって、現実と夢（この一部が小説を書くことであった）の拮抗を描き、結果的に文学の位置を相対化」したものと考察している。

どの論考も貴重な指摘を含んでおり参考になる部分が多い。しかし、これまで比較的重視されてこなかった要素に注目すると、更なる仮説を立てることもできるようなのである。そこで本稿では、掲載誌や主人公の造形等にも注目しながら、改めて内容の検討を試みることにする。なお、本稿における作品の引用については、現代の漢字表記に直し、ルビを省略した。

二 掲載誌『中学世界』からの影響

「屋根裏の法学士」が目立った評価を得られなかった理由を、渋谷川氏は掲載誌である『中学世界』が「文壇的雑誌でなかった」¹⁶とめとしている。しかし、小説が時に雑誌の傾向に合わせて書かれることがあるということを考えると、『中学世界』が「文壇的雑誌」ではなかったということには注意が必要であると思われる。文芸色の薄い、特殊な傾向を持つ雑誌であればあるほど、掲載作品の内容への干渉度は強くなると考えられるからである。では、『中学世界』とはどのような雑誌であり、掲載作品の内容にどのような影響を与えていた可能性があるのだろうか。

この問題を考えるにあたって、まず雑誌の基本的な事項を確認しておきたい。菅原亮芳氏によれば、『中学世界』は、明治三十一年から昭和三年にかけて博文館から刊行された雑誌で、「中学校生徒を読者対象として中堅国民としての教養と常識を学校教育を補完する目的で刊行された」という。当初は中学生の教養涵養に重点が置かれていたが、受験競争の激化とともに受験関係記事の量が増え、一九一〇年代には受験専門誌の傾向が強くなった。

しかし、明治期を中心として文学作品や文学関連記事の掲載にも比較的熱心であり、山本昌一氏によると、明治期においては田山花袋・国木田独步・夏目漱石・永井荷風・島崎藤村他、著名な作家の作品が掲載された。さらに、紅野謙介氏の論考¹⁹によれば、本誌は読者投稿の活用にも積極的に取り組んでおり、『文章世界』（『中学世

界」と同じく博文館の発行)が創刊されて投稿掲載機能の中心がそちらに移るまでの間に、花袋が投稿小説の選者を務めるなどして後進を育成したこともあつたといふ。⁽²⁰⁾

さて、右のように基本的事項を確認してみると、『中学世界』は時期によって傾向を変化させていることがわかるが、特に「屋根裏の法学士」が掲載された時期は、受験専門誌としての傾向を強めていた時期にあたるようである。しかし、この頃の目次を見てみると、誌面全てが受験情報に占められていたという訳ではないようで、受験情報一色の増刊号が発行されるなど受験情報の提供に熱心ではあるが、通常号においては直接受験にかかわらない、教養の涵養や人格の訓育を目的とする読物も多く掲載されている。また、特に小説について言えば、少なくとも大正七年度においては通常号後半の頁に一作を掲載するのが定型となっており、その他誌面の余裕に応じて数作品が掲載されたり、連載が行なわれることもあつたようである。

ところで、「屋根裏の法学士」は、右で述べた卷末小説として本誌に掲載されたものであるが、試みに本作掲載頃の卷末小説を挙げると次の通りである。

柳澤健「別れ」(大正七年四月号)

菊池寛「海鼠」(五月号)

加能作次郎「水は流れる」(六月号)

江口渙「若き勇者の悲しみ」(七月号)

白石実三「新任教師より」(八月号)

佐野天声「石塚」(九月号)

加藤武雄「S川の筏」(十一月号)

水守亀之助「山猿」(十二月号)

久米正雄「憎まれた二人」(大正八年一月号)

小野政方「眩き心」(二月号)

花房春生「退学事件」(三月号)

これらの作品に目を通してみると、主題など踏み込んだ内容の点では各作品それぞれに独自の設定・工夫が見られるが、表面的な部分では共通した要素を見出すことができるようである。例えば右の十一作品のうち、中学生を主人公にしたり、中学校を主要な舞台としている作品は、「別れ」・「海鼠」・「若き勇者の悲しみ」・「新任教師より」・「眩き心」で、中学生が主人公という訳ではないが重要な脇役として登場する「山猿」を加えれば、中学関連作品は六作品にのぼる。さらに、高校生を主人公としたり高校を舞台としている作品が「憎まれた二人」・「退学事件」と二作あり、また、「水は流れる」・「S川の筏」の二作には、中高生ではないものの、同じような年齢層の苦学青年が主人公として登場している。つまり、大正七年度の「屋根裏の法学士」以外の卷末小説は、ほとんどが中学生かそれに近い立場の人物、あるいは中学校かそれに近い舞台を主要な要素として含んでいると言える。

この傾向は、卷末小説以外の、単発的に掲載される小説にも見られるようで、当時の目次には「学生小説」・「学生喜劇」といった角書きのついた作品が見られる。こうしたことを総合すると、この頃

の巻末小説（及びその他掲載作）の作者達の多くは、それぞれの資質や関心に応じた内容を作品に盛り込みつつも、中学生・中学校、あるいはそれに近接する立場・場所を重要な要素として作品内に組み込んでいたと言える。『中学世界』の読者は、概ね中学生かそれに近い立場の青年である。それを考えると、こうした作者達の工夫は恐らく、『中学世界』読者の興味をひくためのもの、あるいはそれを目指す編集者の意向を受けてのものと思われる。

さて、『中学世界』掲載作に概ね右のような傾向が見られるということを確認した上で「屋根裏の法学士」に目を向ければ、主人公の鈴木万作はとうに大学を卒業した恐らく二十代も後半にさしかかった男で、人物造形の点で明らかに例外的である。大正七年度掲載作の中にも、石工の生涯を扱った「石塚」や、新任中学教師を主人公とした「新任教師より」、大変な田舎者を迎えた東京の商店の様子を描いた「山猿」と、少年・学生といったくりに収まりにくい人物を主人公・中心人物として取り上げているものもない訳ではないが、それでも万作の造形は、特異なものであると考えられる。

その一方で、本作は末尾に「彼はこの世を軽蔑した、だからこの世も彼を軽蔑した」という、作品のまとめとも教訓とも受け取られる文言が付されているという特徴があり、このような文言で物語の焦点を分かりやすく示しているのは、読者を鑑賞力の涵養途上にある中学生と想定しての配慮と思われる。またストーリーを見てみると、全体のかなりの部分が主人公の履歴の説明にあてられており、しかもそれは主人公がどのような学校を選び、どのような学生生活

を送ったのかという、進路情報的なものとなっている。人物像がこうした情報を中心にして構成されることで、恐らく本作の主人公は、『中学世界』を通じて教養と受験知識を身につけ世に乗り出して行こうとする読者にとって興味ある存在になっていると思われる、この点にも掲載誌への配慮が認められよう。

三 本作の焦点

先に触れた通り、本作末尾には物語内容をまとめる文言が付されている。これによれば、万作は「この世を軽蔑」し、そのために「この世」から「軽蔑」し返されたのだという。つまり万作の失敗の原因は「この世を軽蔑」したことにあり、作品の焦点もそこにあるということになるようだが、物語をざっと追ってみると、万作の作家志望など、表面的に見れば単純に「軽蔑」に還元しづらい要素が展開上重要な働きをしているようである。そこで本章では、末尾の文言を踏まえつつ物語内容を検討し、なぜ本作の焦点が「軽蔑」にあると言えるのか、考えて見ることとした。

本作の基本構成は万作の経歴を説明する第一部、母親への送金義務を免除されて以降のものを中心にエピソードが並べられる第二部、そして飛行実験とその失敗を描くクライマックスの第三部と、大まかに三分することができると言える。このうち第一部を見てみると、大まかに青年期にかけて万作がどのように過ごしてきたかを窺い知ることができると言えるが、その内容は概ね、実業家や高学歴エリートとしての出世に目もくれず、作家志望を堅持する万作の姿が描かれていると

まとめることができるようである。このことから、本作はこの作家志望という要素に相当の紙幅を費やしていると言える。しかしその一方で、万作の経歴説明がようやく〈現在〉に追いつきかけた時、彼はそれまで負っていた母親への送金義務の免除を伝える手紙を受け取るが、それをきっかけとして次のような心理変化を起こしてしまふ。

もう何もしくなくてもいい、様な気がし出した、又何をする気もなくなつた。一旦学校まで蔑にして志を立てた事があるから、どうかして「大人の小説」だけは書き始めようと、時々励む心は起つたが、さて書き上げても、これがお伽小説の様においそれと金に代へてくれるところか、採用して貰ふだけでも一苦勞をしなければならぬかと思ふと、忽ち筆を投げてしまふのであつた。

以来、彼は毎日を友人の訪問か、でなければ睡眠に過した。つまり、ここで万作は経済的負担の減少からくる安心感に押し流される形で、長年持ち続けた創作意欲を喪失してしまふのである。

万作の〈作家志望〉を考へる上で見逃せないのは、語り手による万作の性格の説明である。本作の語り手は万作の履歴や種々のエピソードを紹介しながら、折りに触れて彼の基本的な性格について言及している。例えば、第一部を見てみると、大学卒業後の職探しの話題から万作の性格を「妙に高慢」と説明し、翻訳やお伽話執筆のアルバイトを探すという話題の部分でも、「彼はそんなにも高慢で、そして又内気な男であつた」と述べて、万作が「高慢」であること

を強調している。さらに続く第二部を見ると、万作があらゆる芸術に不満を持つていることが示される部分で、語り手は次のような一層まとまつた説明を加えている。

一体、彼は少年の頃から、何方かと云ふと独りよがりの、少し物の出来るのを鼻にかける、高慢な子であつた。一口に言ふと、彼は何がなしに浮世を軽蔑し切つた。その傾向が年と共に増長して、今では自分ながら少し病的だなど思はれる位になつてゐた。

この説明によれば、万作の「高慢」さは大学卒業以降にのみ見られるものではなく、少年時代にまで遡る根深いものであり、しかもそれは「浮世」への「軽蔑」を伴っているのだといふのである。万作の性格がこのようなものになつた背景には、秀才でできがよかつたことその他、中学一年まで富裕な家庭の子として育つたことなどもあることと想像されるが、ともあれここで特に注意したいのは、こうした性格が芽生えた時期が、作家志望を抱いた時期と重なることである。これは彼の作家志望が、「高慢」な性格に密接に結びついたものであることを示しているものと思われる。

文学には人間や社会の真実を伝える機能があり、それにまつわる創作・享受に第一義的な魅力があると言へるが、この他副作用的な働きとして、携わるものに一種の優越感を与えるという機能があり、ここに第二義的な魅力が潜在している。これは芸術を高尚なものとして、芸術家を文化的選良と捉へる者が往々に魅力として感じるものであるが、「高慢」で「浮世を軽蔑」する万作はこの二義的な魅力

に極めて敏感であったことと想像される。

また、少し角度を変えて考えてみると、万作は中学三年生の時に作家となることを志して以来、現在に至るまで長い準備期間を過ごしているが、その間、翻訳やお伽話以外、いわゆる「大人の小説」を全く生み出せていない。後に語り手は万作に「勇氣」や「常識」とともに「根氣」がないことを指摘しているが、実績を見ると万作には何より創作の才能が欠如していたと考えるのが自然である。

また作中に示される万作の文学にまつわる思考を見てみると、彼は「文学作家」の鑑賞力低下についての不満を漏らす際、通りすがりの女への批評能力を眼力の有無を測る一つの基準として持ち出しているが、彼が挙げる目の付け所はすべて人物の外観にまつわるものであり、明治の硯友社系作家の感性を髣髴とさせる。さらに、料理から新派悲劇にいたるありとあらゆるものを鑑賞の対象とし、人と違った評価を器用に下して悦に入ることが説明されている部分からも、彼の性格とともに、広く風俗を見渡し素材として自在に活用していく戯作者的な発想が窺われる。これらの部分からは、万作には新時代の文学観が欠如しており、また彼が自分の感性の古さに気付く敏感な感受性も持ち合わせていないということがわかる。これら一連の傾向は、彼の文学的才能が極めて不完全（無効）なものであることを示しており、彼が文学の第一義的魅力を感じ得ない、第二義的魅力に惹かれざるを得ない存在であるということの間接的に提示するものと思われる。

以上を総合すると、万作の作家志望は、文学への純粹な憧憬に基

づくものではなく、むしろ作家の立場や創作活動がもたらす世間に對する優越感に惹かれての志望、つまり万作の「高慢」さや、世間に優越することを求める気持ちの一つの表れと見ることが出来る。

また、そう見る事によつて、万作が長い不毛の準備期間を経て創作意欲を萎えさせてしまったこと、その後作家という目標の変わりを求めるかのように相撲取り・判検事・飛行家・そして實際の飛行と、(非凡)な地位・状況に思いをはせ、判検事・飛行については成就こそしなかつたもののそれらを目指して實際に行動を起こしたことの理由も理解できる。

つまり本作は、長く不毛な準備期間を経たために作家志望と言う具体的な希望を維持できなくなつた万作が、根本にある欲求を強めつつ愚かしい生活を繰り返すとともに、新たな欲求のはけ口を求め、全て取り返しのつかなくなつたところで「輕蔑」の前提である「高慢」を碎かれる物語、というように整理することが出来る。物語末尾の文言は、こうした物語内容をまとめるために、先に引用した形で付されることになつたものだろう。

なお、物語を以上のようにまとめると、深刻な内容のようにも感じられるが、本作はあくまで嘲笑的な語り手と、誇張的な登場人物とによつてユーモラスな雰囲気濃厚に帯びている。これに掲載誌の読者層も加えて考えれば、本作は「高慢」に起因する失敗談に、近代的な装いと、笑いの手法とを施した滑稽譚と見ることが出来るだろう。

四 〈余計者〉 文学との繋がり

前章では本作を滑稽譚とまとめたが、本稿冒頭に引用した好評を改めて見ると、本作のこうした枠組の中にはさらに同時代人を惹きつける要素があったのではないかと想像される。それについて考える上で気になるのは、第二章の末で指摘した、『中学世界』巻末小説の主人公として鈴木万作の造形が例外的であるということである。先に述べたように万作は、学生でも青少年でもなく、また教員やその他学校にかかわる人物でもない。二十代も後半にさしかかりながら仕事もたず、食べて寝るほかは、押入れの中で気ままな妄想に耽り無為に過ごしている人物である。本作の主人公はなぜこのような変わった造形がなされているのだろうか。物語の演出的な視点で言えば、年齢的にも境遇的にも追い詰められている状況だからこそ、万作の性格や、最後の落ちが際立ってくるということもありそうだが、他に考えられることはないだろうか。

一つの可能性としては、万作は先行の〈余計者〉小説の登場人物たちと繋がっているということが考えられる。これについて、小林隆久氏は宇野の読書傾向などを踏まえつつ、ポオ他フランス文学の作品に登場する「覗く人」（都市文学固有の遊民）との繋がりが、スウヴェストル『屋根裏の哲人』の主人公との繋がりが（「世に容れられない、あるいは俗世間に迎合することを潔しとしない孤独者である点」と、「覗く人」的部分を持つ点で性格が似ているという）など、フランス文学の遊民との結びつきを指摘しており、長谷川天

溪の好評もそれを感じ取つてのもの⁽²¹⁾と見ていい。しかし、敢えて他にも目を向けるとすれば、日本の〈余計者〉小説とのつながりにしても、宇野にとつての、また当時の読者にとつての身近さを考えれば検討する価値があるものと思われる。

そもそも〈余計者〉とは、渡辺雅司氏によれば次のようなもの⁽²²⁾である。

19世紀前半のロシア文学に特徴的な主人公のタイプ。(中略)
西欧の先進思想を身に着けながら、デカプリストの乱(1812-1825)以降の言論統制と官製ナショナリズムの瀰漫するなかで、周囲の凡俗な社交生活に疎外感を抱き、自らの知的・精神的優越性を強く意識しているが、現実の民衆を知らぬため具体的行動に出ることはできず、言葉と行動が一致せず、つねに倦怠感と猜疑心にさいなまれていた人物像のことをいう。

このように〈余計者〉は、厳密に言えば十九世紀前半のロシアの社会状況と不可分な文芸上の概念であるが、社会状況を異にする日本の文学においても、ロシア文学の強い影響を受けつつ発展する中で〈余計者〉が登場しており、その典型について松本鶴雄氏は、「何処へ」の主人公菅沼健次を取り上げながら次のように述べている。⁽²³⁾

菅沼健次は当時のルージンの知識人であり、エリートである。しかし一方では世の中全てが愚劣に見え、人生に幻滅し、あらゆる思想や行動に絶望する。裏町で演説している救世軍の男を羨しいと思うのだが、自分では何の行動にも移れない。周囲か

らは変人に思われている。どちらかと言えばロシア的余計者と
 いうよりは「身をえうなきもの」と思いたがる日本古来からの
 出家遁世型の文人氣質により近い。ここにいわゆる（日本の余
 計者）の典型がある。

恐らく、宇野や大正時代の文学愛好者は、西洋文学に積極的に触
 れつつも、こうした（日本の余計者）の登場する小説を好むにつけ
 好まざるにつけ身近に感じていたことと思われる。それを踏まえた
 上で、（日本の余計者）と鈴木万作とを並べてみると、万作は一応
 経歴的には知識階級の人間であり、世間に対して優越感を感じてい
 るものが高邁な理想は持つておらず、現実的行動力にも乏しいと
 いった点で、（日本の余計者）と共通した要素が見られることがわ
 かる。しかしその一方で、万作は知識階級の人間でありながら、思
 考や言動のレベルが低く、時に子どものように見えることすらある。
 また、優越感は知識や教養に基づくものではなく「高慢」な性格に
 由来するものである。高邁な理想や実行力に欠けるといふ点も、深
 い幻滅によるものではなく、勝手な妄想以上のものは思い描けな
 かったり、怠惰で根気がないなど性格的に実行に向かなかつたりす
 ることが原因である。さらに加えれば、万作は「出家遁世型の文人
 氣質」についても持ち合わせている様子がない。このように、万作
 と（日本の余計者）の典型イメージとを並べてみると、表面的には
 共通する要素があっても、人物の基底にあって（余計者）に深みを
 あたえるものが万作からは徹底して剥ぎ取られているということが
 わかる。

なぜこうした相違点が生じるのかについては様々な答え方ができ
 そうであるが、筆者としてはこうした人物造形によつて、万作が
 （余計者の）でありながら、読者に嘲笑される滑稽譚の主人公と
 なっていることに注目したい。一般的に、既存の文学的素材を笑い
 の材料にするということは、作品に新鮮な印象を与える早道であり、
 新参作家が筆力を最も分かりやすくアピールできる方法の一つであ
 る。宇野は（滑稽化）のこうした効果に注目して、それまで真面目
 な文学の登場人物であった（余計者）を笑いの対象とすべく、変則
 的な人物造形をおこなったのではないだろうか。

宇野は本作に先立って「二人の話」を発表しているが、後の回想
 によれば、編集者だった秋庭俊彦に作品掲載を頼む際、小説を載せ
 てほしいと頼むと軽蔑され断られると思ひ、小品を出したいと頼ん
 で了承を得たらしい²⁰。これは後で分量の多い小説を渡しても、内容
 が評価されれば載せてもらえるだろうと内々考えてのことであるが、
 このエピソードからは彼の自信とともに、なんとか文壇に自分の腕
 をアピールしようという宇野の強い思いも窺える。こうした宇野の
 様子を見ると、統いて発表された「屋根裏の法学士」についても、
 掲載誌は主要文芸誌ではないながら、文壇人の誰かが目を通す可能
 性を信じて、許される限り小説として興味あるものを書くこととし
 たのではないかと推測される。そして、そうした宇野の意識を念頭に
 置くと、当時の文壇人が最も身近に感じたであろう（日本の余計
 者）という文学素材を活用した可能性も、全くないとは言いい切れな
 いものと思われる。

なお、長谷川天溪は「現実暴露の悲哀」⁽²⁵⁾という評論の中で、現実をむき出しにする芸術の意義を説いている。本作の展開を大きく捉えれば、主人公が〈現実の暴露〉に見舞われる話と見ることができ、この点で天溪の発想と重なるが、失敗談の多くは多少なりとも〈現実の暴露〉を伴うものであり、単に〈現実の暴露〉が見られるというだけでは天溪もそこまで本作を評価しなかっただろう。しかし、本作に〈日本的余計者〉という素材が取り込まれていると見れば、天溪が本作を文学的な文脈で受け止めた理由も理解でき、またこれに加えて、〈日本的余計者〉がしばしば自然主義文学の作品に登場していることを想起すれば、彼が特に高い評価を下したことに納得ができるものと思われる。

五 おわりに

以上のように、「屋根裏の法学士」は基本的には「高慢」を中心に据えた滑稽譚であること、そしてそうでありながらも文学愛好者の目にもとまるよう、主人公の人物像が〈余計者〉と結びついた特殊なものにされていることを確認した。ところで本作発表後、宇野は「転々」・「蔵の中」の執筆と、文壇デビューへ向けて急速に歩みを進めていくが、デビュー後の作品発表の様子を見ると、「屋根裏の法学士」による小さな成功は、単に宇野の執筆意欲を向上させる以上の働きをしたといえるかもしれない。宇野はデビュー後、連作短編〈苦の世界〉他、自身の女性関係に取材した作品を発表する一方で、より滑稽譚の色彩の濃い作品も多く文壇に送り出している。

それら諸作品の意義について現状筆者には考察する用意がないが、そのような特異な作家活動がなされた背後では、滑稽譚で批評家の評価を得た「屋根裏の法学士」の成功体験が宇野を励まし、彼の活動を方向付けていた部分があったのではないかと思われる。そうすると本作は、宇野の創作の一系列を理解する上での、貴重な参考とも見ることができのではないだろうか。

注1 田澤基久「資料紹介 宇野浩二の投書家時代―『新文林』より―」
 『国語国文学報』五十集 平成四年三月・同「宇野浩二の投稿作品―『秀才文壇』より―」(愛知教育大学研究報告(教育・社会))五十五輯
 平成十八年三月)

2 増田周子「宇野浩二小説(創作)目録―宇野浩二童話目録―」宇野浩二著書目録(宇野浩二文学の書誌的研究)和泉書院 平成十二年六月・渋川驍「宇野浩二論(中央公論社 昭和四十九年八月)

3 『大学及大学生』(大正七年八月)

4 『中学世界』(大正七年十月)

5 増田周子「宇野浩二文学に対する同時代評」(前掲『宇野浩二文学の書誌的研究』前掲『宇野浩二論』)

6 宇野浩二「私の小説道」(『新潮』昭和二年一月)

7 『解放』(大正八年九月)

8 宇野浩二「蔵の中・子を貸し屋 他三篇」(岩波書店 昭和二十六年六月)

9 前掲「私の小説道」

10 水上勉「宇野浩二伝」(『水上勉全集』十六卷 中央公論社 昭和五十年一月)

11 松下裕「年譜」(『中野重治全集』二十八卷 筑摩書房 昭和五十五年五月)

12 宇野は『蔵の中 外四篇』(改造社 昭和十四年八月)の「あとがき」

で、「長谷川天溪は嘗て田山花袋等と共に自然主義の錚錚たる論客であったから、二十八歳の私には、自然主義の論客から自然主義的でない自分の小説が曲形にも褒められた事が、嬉しかったといふ以上に、可なり励みになった。」と回想している。

- 13 小林隆久『夢見る部屋』の系譜―宇野浩二とボオの文学における室内空間―(『外国文学』三十一号 昭和五十八年三月)
- 14 田澤基久「宇野浩二初期作品の検討―二人の話―」から「蔵の中」まで(上)(『国語国文学報』四十五集 昭和六十二年一月)
- 15 萩原子「書くこと」をめぐる小説―宇野浩二「屋根裏の法学士」『転々』―(『淵叢』八号 平成十一年三月)
- 16 前掲「宇野浩二論」
- 17 教育ジャーナリズム史研究会編『教育関係雑誌目次集成 第三期 人間形成と教育編』三十三卷(日本図書センター 平成四年一月)
- 18 山本昌一「中学世界」(『近代文学大事典』五卷 講談社 昭和五十二年十一月)
- 19 紅野謙介「『中学世界』から『文章世界』へ―博文館・投書雑誌における言説編制」(『文学』四卷二号 平成五年四月)
- 20 ただし、永井聖剛氏の論考「『文章』世界」を生きたる中学生たち―『中学世界』から『文章世界』への移行―(『愛知淑徳大学論集 メディアプロデュース学部篇』一号 平成二十三年)によれば、国家有用の士の育成を目指す傾向が強かった明治後期の『中学世界』においては、文学的・個人主義的な投書は反発を受けがちだったようである。
- 21 前掲『夢見る部屋』の系譜―宇野浩二とボオの文学における室内空間―
- 22 渡辺雅司「余計者」(『集英社 世界文学事典』五 集英社 平成九年十月)
- 23 松本鶴雄「ロシア文学と明治(余計者)小説考―「浮雲」、「其面影」、「青春」、「何処へ」、「それから」を中心に―」(『群馬県立女子大学紀要』四号 昭和五十九年三月)
- 24 前掲「私の小説道」

25 『太陽』(明治四十一年一月)。参照は川副国基他注『日本近代文学大系』五十七卷(角川書店 昭和四十七年九月)。

(すがい・くいちろう 大学院博士後期課程在学)